

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 14 日現在

機関番号：16201

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720158

研究課題名（和文） 未記述のキリマンジャロ・バンツー諸語に関する横断的文法記述研究

研究課題名（英文） Grammatical description on under-described languages across Kilimanjaro Bantu area

研究代表者

品川 大輔（SHINAGAWA DAISUKE）

香川大学・経済学部・准教授

研究者番号：80513712

研究成果の概要（和文）：それまで言語学的な記述がなされてこなかったいくつかのキリマンジャロ・バンツー（チャガ）諸語を対象に、同地域を地理的に横断する形で文法記述調査を行った。とくに時制や相，モダリティーを表示する文法形式について，その体系的な言語間対応を明らかにし，資料的空白を補う成果を上げた。それら成果は，2 つの国際学会を含む口頭発表や論文をとおして，国内外の研究者コミュニティに発信した。

研究成果の概要（英文）：This project aims to describe some of Kilimanjaro Bantu languages (KB) for which sufficient linguistic data have not been provided so far, by conducting field research crossing over Kilimanjaro and Arusha regions of Northern Tanzania. Through the research, morphological correspondences among the languages, especially those of the Tense-Aspect-Modality marking Grams, are clarified, which in turn contributes to fill the lack of linguistic information in the previous studies on KB. The outcomes of the research have been presented to academic communities through international conferences, book chapters etc.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 22 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
平成 23 年度	800,000	240,000	1,040,000
平成 24 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

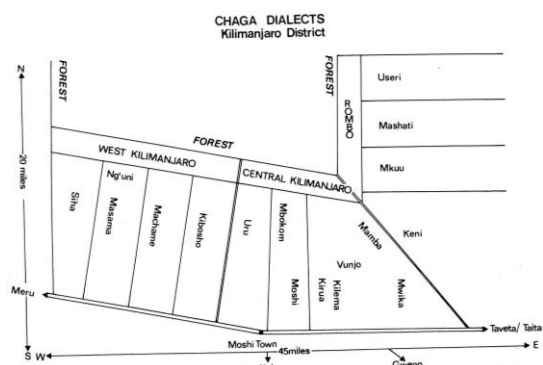
キーワード：形態論，バンツー諸語，形態統語論，時制，アスペクト，モダリティー

1. 研究開始当初の背景

研究開始段階までに，報告者は，タンザニアおよびケニアのバンツー諸語（系統的にはニジェール・コンゴ語族，ベヌエ・コンゴ語派に属する）のうち，とりわけキリマンジャロ・バンツー諸語（Kilimanjaro Bantu Languages, 以下 KB）に属するルワ語（Rwa,

地図中では Meru と表記）の音韻，文法に関する記述研究を行い，それを博士学位論文にまとめたが，ルワ語を含む西キリマンジャロ諸語（WK）には，未だ十分な記述が行われていない言語が残されていた。例えば，KB の時制・アスペクト（TA）に関する全体像を捉える試みである Nurse（2003）では，そういつ

た未記述言語に関するデータ不足がゆえに、KB 内部における TA 体系の歴史的発達を包括的に明らかにしうる段階には至っていない状況が指摘されている (ibid.: 69).



2. 研究の目的

このような状況を背景に、本研究は、他研究者による先行研究も含め、言語個別的なレベルにとどまっていたこれまでの研究を、広く KB 諸語全体において捉え直すとともに、言語類型論的また言語動態論的の視点を導入することで、理論研究を含めたバンツェ諸語研究に対してより効果的かつ直接的な貢献をなすことを目指すものである。

具体的には、KB 諸語のうち、とくに、これまでの研究において十分な記述資料が得られていない諸言語について横断的に文法記述調査を行い、言語間の文法形式の体系的対応関係を明らかにすることを目的とした。そのような言語には；シハ (Siha) 語 (あるいはシハ方言。以下すべて「～語」として言及)、グニ (Ng'uni) 語、マサマ (Masama) 語 (以上 WK)；ウル (Uru) 語、ンボコム (Mbokom) 語、マンバ (Mamba) 語、ムィカ (Mwika) 語 (以上中部キリマンジャロ諸語、CK) さらにはロンボ (Rombo) 諸言語およびカヘ (Kahe) 語など相当数の言語が挙げられるが、研究の目的および時間的等の制約に鑑みて、その直接の記述対象としてはシハ、グニ、ウル、さらにロンボ諸語に含まれるケニ (Keni) の各言語に限定した (地理的分布については地図参照、出典 Nurse 1981)。これら諸言語の調査によって、同言語群を構成する諸言語の類型的多様性を明らかにし、ひいては多様性の背後に通底する形態類型論的な原理や、言語変化の動態的なプロセスに光を当てることを目標とした。

3. 研究の方法

研究の方法は、一般的なフィールド言語学のそれにしたがう。すなわち、調査対象言語が話される現地を訪問し、インフォーマント・ワークによって音韻、形態、統語レベルの記述分析を行う。調査における媒介言語は、同地域における共通語であるスワヒリ語を

用いて直接対面調査を行う。また、研究成果の効果的な発信と、現地調査における理論的、実証的フィードバックを得るために、ダルエスサラーム大学等の現地研究機関のみならず、ヨーロッパの (とりわけアフリカ言語学の盛んなロンドン大学 SOAS, ライデン大学等) 研究機関と連携を図る。以下に、研究開始当初における、年度ごとの研究計画を示す。

(1) 平成 22 年度

2 度の現地調査を行う。1 回目の調査においては、博士論文ならびにその後の研究において十分に扱いきれなかったルツ語の文法項目についての、補完的な調査を遂行する。さらには WK に属するシハ語、グニ語について、その形態統語論的特性に関する集中的な記述調査を行う。2 回目の調査に関しては、シハ語、グニ語に関する継続調査を行うとともに、次年度に本格的に着手するウル語、ケニ語に関する予備的調査を行う。

また現地調査の滞りに合わせて、KB に属するいくつかの言語に関する記述データを所蔵するダルエスサラーム大学・スワヒリ語研究所での文献調査を遂行する。

(2) 平成 23 年度

初年度の調査で得られた (ルツ語)、シハ語、グニ語のデータの分析を進め、さらに部分的にデータが公刊されているヴンジョ語等に関する先行研究 (cf. Mushi 1994, Nurse 2003, Nurse 2008, Raum 1909 等) をつぎ合わせながら、WK 諸語の文法機能形式の体系的対応の構築を行う。現地調査に関しては、ウル語およびケニ語についてフィールドワークを開始する。

さらに、これら言語のデータ、および先行研究から得られる他 KB の資料について、KB 内における類型的多様性に関する具体的なパラメータ (言語特徴を類型化するうえでの形式的指標) を用いた統語類型論的分析を行う (バンツェ諸語統語論におけるパラメトリックな類型論的研究については、例えば Marten et al 2007 を参照)。

(3) 平成 24 年度

研究最終年度においては、キリマンジャロ山のケニア側で話される KB の一であるダビダ語について、申請者が既に有するデータを補足する形で調査を進める。その滞りに先立ち、初年度、2 年目において調査を行うタンザニア側の各言語について、補完的な調査を行う。

3 年間で得られた最終的なデータをもとに、KB 全体の体系的対応および文法変化に関する研究、さらにはそれら言語間に認められる類型的多様性およびそれを生じせしめる背景的原理についての研究をまとめ、内外のバ

ンツー諸語研究者コミュニティーに成果を発信していく。具体的には、ライデン大学(オランダ)にて毎夏開催される、Colloquium on African Languages and Linguistics に参加する。

[文献] ◆Marten, L., Kula, N. and N. Thwala 2007 “Parameters of Morpho-syntactic variation in Bantu”, *Transactions of the Philological Society*, 105-3 ◆Moshi, L. 1994 “Time reference markers in KiVunjo-Chaga”, *Journal of African Languages and Linguistics* 15, pp. 127 - 159, Walter de Gruyter ◆Nurse, D. 1981 “Chaga/Taita” /in/ Hinnebusch, Thomas H. (Ed) *Studies in the Classification of Eastern Bantu Languages*, pp. 127 - 161, Helmut Buske ◆Nurse, D. 2003 “Tense and Aspect in Chaga”, *Annual Publication in African Linguistics Vol. 1*, pp. 69 - 90, Rüdiger Köppe ◆Nurse, D. 2008 *Tense and Aspect in Bantu*, Oxford University Press ◆Raum, J. 1909. *Versuch einer Grammatik der Dschagga-Sprache (Moschi-Dialekt)*, Berlin, Reimer

4. 研究成果

本助成事業によって行われた現地調査は、平成22年度2回(ルツ語, シハ語, ウル語), 23年度1回(ウル語), 24年度1回(ロンボ語ムク方言)の計4回である。WKのグニ語, またケニア側のダビダ語については調査を行うことはかなわなかったが, それ以外については概ね当初計画どおりである。

これらの調査によって得られたデータや, そのための先行研究サーベイに基づく研究成果は, 雑誌論文1本, 学会発表5本, 図書(分担執筆論文)3本に上る。

これらのうち特筆すべきは, 当初計画において重視していた海外のアフリカ諸語研究コミュニティーに向けての成果発表である。2012年8月に行った, 7th World Congress of African Linguistics (カメルーン, ブエア大学)における口頭発表“Bidirectionality in the grammaticalization of ‘come’ and ‘go’ in Chaga”においては, モダリティーマーカーないし時制マーカーとして機能する「来る」, 「行く」に相当する動詞を語彙的起源とする文法形式について, まさにキリマンジャロ・バンツウ諸語を横断的に対照した分析を示した。これによって, 「来る」動詞が確実性を表示する言語と, 不確実性を表示する(「行く」によって確実性を表示する)言語とがあることを示したうえで, そのような一見すると相反するモダリティー概念が発達した背景に, とりわけ未来時制表示システムの相違が関与している可能性(前者はそ

の未来時制体系に近・遠の時間的対立を認めるのに対し, 後者はその区別を欠く)を例証した。同じく2012年8月の42nd Colloquium on African Languages and Linguistics (オランダ, ライデン大学)における”Habitual *ci-* in Chaga-Uru”では, ウル語において, 少なくとも分節素レベルでは同形(*ci-*)である未来時制マーカーと習慣相マーカーについて, 表面的には同形であるものの, 超分節素レベル, また形態統語論レベルで一種の異化現象を見せており, 結果として, 未来時制と習慣相の概念カテゴリー上の対立が維持されていることを具体的なデータとともに示した。また, これら研究発表の場で, ロンドン大学 SOAS やライデン大学といったヨーロッパの研究機関や, アメリカの研究機関の研究者と協力的な関係を構築することができたことも, 大きな成果であった。成果公開の面で特筆すべきは以上の2点である。

それ以外に, 雑誌論文としては, キリマンジャロ・バンツウ諸語の動詞形態論および時制アспект関係の先行研究および資料を渉猟し, 本研究調査のための作業仮説を提示した「キリマンジャロ・バンツウ諸語における TA 標示形式とその変化についての覚書」を著した。また, 書籍の分担執筆論文としては, 日本語で書かれたものとしては初めてのルツ語の文法概説を上梓した。また, 「キリマンジャロ・バンツウ諸語から見た日本語の膠着性—動詞屈折形式における膠着型言語の類型的差異—」(丹羽一弥(編)『日本語はどのような膠着語か』所収)は, キリマンジャロ・バンツウ諸語の形態論的特徴をとおして, 同様に膠着的ではあるが, その統辞原理が異なる日本語の動詞形態論に光を当てるという試みであり, これは, 日本語研究者を含む, 国内の言語研究コミュニティーに向けた成果発信である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①品川大輔「キリマンジャロ・バンツウ諸語における TA 標示形式とその変化についての覚書」, 『香川大学経済学論叢』第83巻第1-2号合併号, 査読無, 2010年, 101-136頁。

[学会発表] (計5件)

①品川大輔「チャガ諸語に関するいくつかの謎—キリマンジャロ横断フィールド調査から—」, 名古屋言語研究会第100回記念大会, 名古屋大学, 2012年4月28日

②Shinagawa, D. Bidirectionality in the grammaticalization of ‘come’ and ‘go’ in Chaga, 7th World Congress of African

Linguistics, University of Buea, Cameroon,
2012年8月24日

③Shinagawa, D. Habitual *ci-* in Chaga-Uru,
42nd Colloquium on African Languages and
Linguistics, Leiden University, the
Netherlands, 2012年8月27日

④品川大輔「チャガ諸語の移動動詞に由来する
モダリティ・マーカ― ―「確信性」解釈
の不一致をめぐって―」, 東京外大 AA 研共同
研究課題「アフリカ諸語のイベントの統合の
パターンに関する研究」2012年度第2回研究
会, 2012年9月15日

⑤品川大輔, 阿部優子, 森本雪子, 米田信子
と共同「バントゥ諸語の動詞項構造とそれに
影響を与える諸要因」, 動詞項構造研究会,
名古屋大学, 2013年3月9日

〔図書〕(計3件)

①品川大輔「ルッ語 (E61)」, 塩田勝彦 (編)
『アフリカ諸語文法要覧』, 溪水社, pp.
185-194, 2012年

②品川大輔「2010年憲法施行後のケニア都市
部の多言語状況」, 砂野幸稔 (編)『多言語主
義再考』, 三元社, pp. 530-563, 2012年

③品川大輔「キリマンジャロ・バントゥ諸語
から見た日本語の膠着性―動詞屈折形式に
おける膠着型言語の類型的差異―」, 丹羽一
弥 (編著)『日本語はどのような膠着語か―
用言複合体の研究―』, 笠間書院, pp. 30-47,
2012年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

品川 大輔 (SHINAGAWA DAISUKE)

香川大学・経済学部・准教授

研究者番号: 80513712